歳時記

ダイアリイ

依井貴裕

TAKAHIRO YORII

東京創元社

歳時記

ダイアリイ

依井貴裕

工业学院图书馆
藏书章

GOLDEN THIRTEEN

東京創元社

歳時記（ダイアリイ）

●

著者●依井貴裕（よりい たかひろ）

一九九一年九月三十日　初版

発行者●平松一郎

発行所●株式会社 東京創元社

東京都新宿区新小川町一―五　郵便番号一六二

電話●東京（〇三）三二六八・八二三一（代）

振替●東京六―一五六五

印刷●暁印刷

製本●鈴木製本

乱丁、落丁本はご面倒ですが小社までご送付ください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

41.600－

©Takahiro Yorii 1991, Printed in Japan

ISBN 4-488-01245-0　C0093

目次

プロローグ　5

問題編

I　犯人は記述者？　11

II　託された日記　28

『歳時記（ダイアリイ）』　41

第一章　ブランコの死角　43

第二章　立ち並ぶ闇の墳墓　79

第三章　能面こそ素顔　112

第四章　華やかにミステイク　146

第五章　心地よさの果ては　183

読者への挑戦　215

解決編

III　思いはさりげなく　217

IV　死に急ぐ理由　254

エピローグ　277

解説　泡坂妻夫　284

装画　小泉孝司
装幀　小倉敏夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

歳時記（ダイアリイ）

山口直孝氏に捧ぐ――

プロローグ

いつの間にか、風が止んでいた。肌にまとわりつくような暑さが、一層ひどくなった。

杉原検死官は白衣の袖をたくし上げる動作で、死体からゆっくりと目を逸らした。先程から、わずかに息苦しさを感じている。それは、すぐ上の高速道路から吐き出される、埃と排気ガスのせいではなかった。連日続く猛暑、記録ずくめの酷暑のせいとも言えなかった。それは明白に、死体に対する嫌悪感から来るものだった。

ビルの屋上から飛び降りたのだろう、死体は他の死にざまに比べて確かに醜くはあった。顔を下にして落ちたために、誰の死体か分からないほど、歪んだ形に変わっている。ゆっくり流れ出した血は、焼け付くような舗道のアスファルトに触れて、早くも乾き切っていた。肱の関節から飛び出した骨が不気味で、死体全体がヨガを思わせる異様な姿勢を作り上げている。生前、若い女性だったことが信じられないくらい、変わり果てたひどい死体だった。

しかし、ひどい死体というのなら、もっとひどいものを何度も見たことがあった。全身焼け爛れて、動物の肉が焼ける耐えがたい臭いのする死体。首を切り取られて、赤黒い血溜りにどっぷり浸かったような死体。死後数日経って、蛆が集り、腐乱臭が鼻を突く死体。そんな考えただけ

でもぞっとするような死体を検分しても、嫌悪感を持ったことなど今まで一度としてなかった。女性に似つかわしくない職業を選び、これまで何千という死体を見てきたために、そんな感覚は麻痺しているのだと思っていた。

「大丈夫ですか？」

気が付くと、若い刑事に肩を抱くようにして支えてもらっていた。中野刑事だった。息苦しさが、いつの間にか嘔吐感に変わっている。まるでつわりのようだった。杉原検死官は懐からハンカチを取り出すと、軽く目を閉じ、滲む額の汗を拭った。

風がわずかに戻った気がする。生温かい空気を掻き回しているだけだったが、全くないより少しはいい。陽炎さえも立ち昇りそうな暑気の中、目の前のもの全てが歪んで見えてきた。

「立ち眩み、ですか？」

中野刑事の息が右の耳に掛かった。警察官になるより男性モデルにでもなったほうがふさわしい風貌だ。背は高くないものの、眉の濃い野性的な顔立ちで、大きな目が射るようにこちらを見つめている。この暑さでは汗をかかないはずはないのに、カッターシャツからは何故かアンテウスの香りがした。

杉原検死官は曖昧な微笑みで応えると、中野刑事のもとを離れ、死体の傍らに膝をついた。嘔吐感と戦いながら、いつもの通り検分を始めた。手に持ったハンカチで、口元をしっかり押さえ続けていた。

「飛び降りた瞬間は、目撃されているのですよ。宙に舞って、地面に叩き付けられるところはね」

中西刑事が後ろから声を掛けてきた。ロマンス・グレーとナイス・ミドルのちょうど中間ぐら

いの年齢だった。いかにも温厚そうな眼差しで、柔和なやさしい顔立ちをしている。しかし、笑ったときに増える目元の皺の数が、一通りではない人生の年輪を控え目に示していた。
「ですから、このビルの屋上から飛び降りたことは間違いありません。問題は、自分で飛び降りたのか、それとも誰かに突き飛ばされたのか、ということなのです」
杉原検死官は口元をハンカチで覆ったまま、こもった声で返事をした。
「擦過傷は見当りませんね。誰かに突き飛ばされたのなら、通常、掌や腕の内側、肱や膝などに、抵抗した際の擦過傷が残るものなのですが」
「なるほど」と中西刑事は同意を示した。「しかし、不意を突いたのかもしれません。あるいは、被害者が抵抗できない状態にあった場合も考えられます」
杉原検死官は静かにうなずいた。
「薬物が用いられていたかどうかは、解剖のときに調べておきましょう。死因や死亡推定時刻に関しても、解剖所見で詳しく報告させてもらいます」
「分かりました。それで結構です。目撃者もいることですしね」
中西刑事の返事が終わるか終わらないうちに、何人かの刑事が人垣を押し止めているロープをくぐって、中まで駆け寄ってきた。目撃者の証言や遺体の身元確認などの報告のようだった。しかし、杉原検死官は死体の右手首にある傷を見たときから、その身元に関しては確信があった。絶対に見間違えるはずのない手首の傷だった。
「どうかしたんですか?」
ゆっくりと立ち上がって、ロープの外へ出て行こうとしたとき、中野刑事の声が背中越しに聞こえた。その場に立ち止まり、まだ口元を押さえていたハンカチを懐にしまった。そして、後ろ

を振り向くと、中野刑事がいつの間にかすぐそばまで近づいていた。
「おかしいですよ、今日の杉原さん。いつもと違います」
杉原検死官は小さく首を振った。何も答えずにロープをくぐり、野次馬の人だかりから離れていった。
焼けるような陽射しだった。排気ガスやクーラーの熱で、暑さが増幅されている。異常気象のためか、日が照りつけるだけで、夕立も来ない。舗装道路の隅に積もったわずかな土も白くなり、そこから顔を覗かせている雑草も元気なく萎れかかっていた。
車が列を作って駐車している。大都市ではどこでも問題になっているが、大阪は特にひどい。不法駐車が目立つ。その中には、営業マンなのか、ネクタイを緩めてだらしない姿勢のまま眠っている者もいる。そのボンネットは直射日光をまともに受けて、目玉焼きがすぐ焼けそうなほど熱くなっていた。
高速道路の陰になっているところの方が、いくぶん過ごしやすかった。中野刑事は何も言わずついてきていた。杉原検死官は仕方なく立ち止まると、仕事中は吸わないことにしている煙草を、右のポケットから取り出した。横から手が伸びて、ライターが差し出された。
「この事件は、他殺と見て捜査することになるの？」
一服深く吸い込んでから、杉原検死官はそう尋ねた。
「現段階では、どちらともいえません。とりあえず、ビルの屋上に遺書はありませんでした」
「そう」
捜査はまだ始まったばかりで、方針が決まっていないのだろう。部外者に対して隠している発言のようには見えなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「でも、自殺に違いないわ」
視線をビルの窓に遊ばせながら、独り言を装ってわざと小さくつぶやいた。しかし、その断定的な言い方を逃さず、中野刑事の目がにわかに厳しくなった。
「どうしてそんなことが分かるんです？」
鋭い追及だった。
「前にも一度、自殺してるからよ。手首を切ってね」杉原検死官は、ゆっくり煙を吐き出した。
「死体の右手首にあった傷に気付かなかった？　比較的新しいものよ。あの娘には自殺未遂の前歴があるのよ」
「あの娘？」
「そういえば、あの娘は煙草が嫌いだった」
杉原検死官は二、三服吸っただけの吸殻を投げ捨て、足で丹念に揉み消した。そして、その吸殻を拾い上げると、いつも持ち歩いているシガレット・ケースの中にしまった。
「死体を見て嫌悪感を感じたのは、大学時代以来のことだわ」
中野刑事は怪訝そうな表情で問い返した。
「嫌悪感？」
「そう。それが、今日変だった理由」
風が再び止まった気がした。高速道路を通る車の音が、よけいに大きく感じられた。杉原検死官はそっと目を伏せると、その騒音にかき消されてしまいそうな小さな声で、まるで自分に言い聞かせるようにつぶやいた。
「あの手首の傷。間違える訳がないわ。木の葉ちゃん……。検分していたあの死体は、ほんの一

時間ほど前まで、私のたった一人の姪だった」

問題編

Ⅰ　犯人は記述者？

下宿の部屋にノックがあったとき、多根井理はサークルの機関誌に載せる原稿を書いている最中だった。『Forget-me-not』と題されたそのショート・ショートは、途中、一度も登場しない犯人の名前が最後の一言になるという、凝った趣向が施されている。一気に書き上げてしまいたい作品だった。ＤＥＴＥＣＴ33号の締切は、この夏の合宿までと決められていて、もう目の前に迫っていた。

「ん？」

軽いノックの音を聞いて、理は反射的にドアの方を見遣り、小さく声を上げた。執筆作業を中断させられて、顔を顰めているのが自分でも分かった。

どうせ大学の友達か、サークルの先輩に決まっている。終電にはまだ間があったが、そうに違いなかった。ここは大学から比較的近い下宿ということで、入った頃から何度となく襲撃を受けている。そのせいで一時限目の講義が受けられず、大事な単位を落としたこともあった。

もしかしたら、隣に住んでいるビデオ好きの友達かもしれない。豊中に住んでいれば、西宮にあるこの大学まで通うこともたやすいはずだが、不動産屋の息子で金があるのだろう、親に家賃を負担してもらって好きなように生活していた。クラブで遅くなるからだと説明していたが、そのクラブというのが人形劇団で、説明というよりは言い訳のように理は感じていた。

いずれにしても、中に入れるべき相手ではなかった。この原稿を書き終えたら、塾で開かれている夏期講習の教材研究をする予定だった。裕福な他の大学生と違って、仕送りをしてもらえない理は、家賃はおろか生活費も自分で稼がなくてはならない。時間の無駄使いは許されなかった。

特に、隣に住む友人には、貴重な夕食として持ち帰ったピザを、おやつを分けてもらっただけのような顔で、かすめとられた経験がある。絶対に入れるべき相手ではなかった。こういうときは、居留守を使うに限る。理はわざと何も言わなかった。

コツコツ。

先程は小さめだったノックの音が、今度ははっきりと分かるくらいの大きさで響いた。どうもおかしい。こんな時間に来るといえば、大学の友達か、サークルの先輩しかいないはずなのだ。たとえ違ったとしても、せいぜい新聞の集金をしている兄ちゃんぐらいのものだろう。大家さんが来たのなら、名前を呼んでくれるはずだった。

「誰？」

得体の知れない新興宗教団体かもしれないと考え、理はいかにも不機嫌な声で返事をした。以前にも、血をきれいにするなどと言って、この時間帯に訪ねられたことがあった。

「多根井さんですか？」

落ち着いた男の声が言った。聞き覚えのないものだった。声だけ聞いていると、かなりの年配にも思える。

「そうですが、どちらさんでしょう？」

理は口調を改めたが、まだドアを開ける気にはならなかった。

「新井進介と申します。田部木の葉の伯父にあたる者です」

「田部先輩の……」
「そうです。木の葉のことでお話ししたいことがあって参りました」
田部先輩――理が入ったときに四年生だった、推理小説同好会唯一の女性部員だった。トランプに惚けている意地悪な他の人たちとは違って、唯一まともに相手をしてくれる先輩だった。わずか一年間ではあったが、読むジャンルやミステリに対する考え方が似ていたために、理は一緒に話をする機会が多かった。女性ではあったが、一番親しみを持っていた先輩だといっても、言い過ぎではなかった。
先輩は三年のときに、同じ学年だった多野（たの）という経済学部の人と結婚していた。名前が変わっても、田部先輩という呼び方はそのままだった。卒業すると、その人の就職先であり、実家のある東京へ引っ越していった。幸せそうだった。それがこの春の話で、夏休みにはサークルの合宿先を東京にして、その後の話を聞こうという予定が立てられていた。
ところが、つい二週間ほど前のことだった。先輩は大阪市内の高層ビルから飛び降りて、自殺したのだった。東京に行ってからどうしていたのか、全く知らなかった部員たちにとっては、合宿を目前にして、寝耳に水の話だった。葬儀も東京で行なわれたらしく、新聞などから入る情報の他は、何も分からなかった。
「こんな夜分に、突然お邪魔して申し訳ありません」
理がドアを開けると、新井と名乗った男はそう言って頭を下げた。大柄な体格で、身長は百八十センチはあるだろう。体だけではなく、手も足も大きかった。体毛の薄い質なのか、顔には髭がほとんどなかった。シャツから覗いている腕にも、産毛が生えているだけだ。しかし、髪の毛だけは大丈夫で、頂上の部分こそ少し薄いものの、頭髪はまだ黒々としていた。

下宿の中は蒸し風呂のように暑かった。部屋は二階だったが、窓から風の入る気配はなく、書類の飛び散るのが嫌で、扇風機を回していなかった。その代わりに使っていた大きな団扇が、備え付けのベッドの上に載せたままになっていた。汗ばんだ手で書いた原稿が、へりの方がめくれ上がった状態で、机の上に置いてあった。

「どうぞ」

理は部屋の中に新井を招き入れた。四畳半一間の狭い下宿だったが、人一人ぐらいなら坐る余地があった。理はドアを閉めると、原稿を片付け、少し慌てながら扇風機を回した。むっとするような暑苦しさの中に、モーターの音が響き始めた。冷蔵庫の中からりんごジュースを取り出すと、小さなグラスに注いでいくつもの氷を浮かべた。

「本当に突然で、申し訳ありません」

新井は勧められた場所に腰を下ろすと、もう一度頭を下げた。仕事の帰りなのか、仕立てのよいスーツを着て、紙包みを抱えている。きっちりと結ばれたネクタイは、ワンポイントの入った水色のストライプで、胸元が涼しげだ。ブランド品ではないが、値の張りそうなもので、自分のお洒落を身に付けている感じだった。

髪が黒いせいで若く見えるが、もう四十の半ばは過ぎているだろう。その物腰や落ち着いた振る舞いから、深い経験が感じられた。鼈甲縁の眼鏡はウェリントン型で、知的な雰囲気を漂わせている。髪の毛もきっちりと七三に分け、やり手の管理職を連想させた。

しかし、表情は決して、晴れ晴れとはしていなかった。眉間には幾重もの皺が寄り、眼鏡の下から覗いている目には力がなかった。肌の艶もよくなく、張りもなかった。ただ、堅く引き締まった口元だけが、決意の強さを表していた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.